

若宮八幡社

創建は弘仁 14 年（823 年）と古く、宇佐神社から分霊したと伝えられる古社で伊勢神宮とならぶ日本の二大早廟です。碑文は、安政 6 年（1859 年）に建立されたもので、拜殿に向かって石段を登った右側にあります。堂々たる朱塗りの楼門は、町内では、若宮八幡社と六所宮だけです。境内には老杉が生い茂る苔むした岩間から大量の清水が湧出しており、宮川滝の口の湧き水と呼ばれています。湧出量は 13000 m³の水量があり、良質の水質で古くから生活用水、農業用水、淡水魚養殖として広く利用されています。湧水は美味しい軟水で豊の国名水⁵ 1 選に選ばれており、飲む事ができます。

を吹く怪物でありました。魔物は難なく娘をさらってしまったため、年頃の娘が居る家では戦々恐々の毎日を過ごしていました。

ある日、夜も更け、午前 2 時を過ぎた頃、凄まじい稲妻とともに胴回り 2 メートルもある魔物の大蛇が姿を現し「おとなしく娘を渡せ、さもなければ一家皆殺しぞ」と大きな声が響き渡たり、悠々と娘のお佐代をさらっていきました。翌日、村の人々は今後どのようにしたら魔物の難から逃れる事ができるのか話し合いました。「この郷に滞在しておられる、源氏の御曹司八郎為朝様は大力無双と聞いている。為朝様をお願いして魔物を退治してもらおう以外に良い方法はあるまい」と、この次第を詳しく話しまし

【若宮八幡社にまつわる武将のおはなし】

源氏の武将、八幡太郎義家の孫にあたる源為義、はちまんたろうよしえ その為義の子どもの八男が由布院に来て大活躍をした源為朝です。みなせいのためいせ 彼は後に一時九州を平定して、自ら「鎮西八郎為朝」と名乗りました。わずか 13 歳で、身長は約 2 m、鋭い豹のような眼光で、知恵といい、武勇といい、彼にかなうものは都に居ませんでした。特に腕の力が抜群で、生まれながらにして強い弓を弾くのにも恵まれた素質を持っていました。為朝がこの地に来て 2 年目の夏を迎えた時、伏磨山ふくまざん に巣くう魔物が毎夜現れ、若い娘を次々とさらっていきました。魔物は獺猛な大蛇か龍のようなもので、全長数 10 m、頭に二本の角を持ち、口から炎

た。すると為朝は快く、力強く、人々を災難から救う事を引き受けました。

その日、夜が更けるのを待って、為朝は愛用の強弓をたずさえて館を出ました。おとりとして村首の娘に正装をさせて若宮八幡社の社殿に座らせ、「伏魔山の主に物申す。娘一人を生けにえとして捧げ奉るのですみやかに召されよ。」と呼び掛けた。

やがて、生臭い風が吹き、激しい閃光が差しに天地を揺るがす地響きとともに魔物の大蛇が現れました。龍のように角の生えた頭を高く持ち上げ、両目からは強烈な光を放ちながら、大きな口を開いたとたんに真っ赤な炎を吹き付けました。普通のものならたちまち腰を抜かしてしまうようなその姿に、為

朝は怯みもせず魔物をひきつけ、前方の大岩に左足を乗せてふんばり、渾身の力をこめて自慢の強弓を引き絞り、眼光に狙いを定めて矢を放ちました。「手ごたえあったり！」と為朝が思った瞬間、異様な叫び声とともに、今までこうこうと輝いていた光が消えて暗闇となり、雷鳴がとどろき、豪雨が降りそそぎました。やがて雷鳴は遠ざかり、豪雨も止み、下限の月がのぼり由布の郷を薄く照らしはじめました。一部始終をうかがっていた村人たちは八幡社の境内に集まり、為朝と村首の娘の無事な姿を見てほっとしました。

その後、魔物は二度と姿を現す事もなく、由布の郷には再び平和が戻りました。

若宮八幡社の本殿の東側にある大岩には、今大きな足跡がくつきりと残されています。これは大力無双の為朝が魔物を狙って強弓をひきしぼると時に、片足を大岩にあげて力をこめた時にできたものといひ伝えられ、しめ縄が飾られています。

また、後に村人たちは、魔物が住んでいたといわれる伏魔山の「池の台」付近に、ひとつのお堂を建て、その霊を鎮めました。そしてその近くに咲く七種類の草花をそろえて供えると雨乞いを叶えてくれるので「七草堂」と称し、山の名前を「福万山」と呼び変えるようになったといわれています。なお、「為朝の足跡」については、この伝説とは別のお話もあります。

為朝が由布郷に滞在中、暇をみては若宮八幡社の境内で弓の練習に励んでいました。ある日、愛用の強弓に矢をつがえ、大岩に左足をあげて渾身の力をこめて引き絞り、北側に立っている岩を射ました。その時、大岩に為朝の足跡が残り、北側の岩の正面中央に矢が当たった傷跡が出来たのだとも言われています。

